

解説

工藤雄一郎¹: 特集「関東平野の低湿地遺跡における古環境研究」Yuichiro Kudo¹: An introduction to paleo-environmental studies at wetland sites in the Kanto Plain

1980年代以降、関東平野では大規模開発に伴い、縄文時代の低湿地遺跡の研究が活発化した。東京都北江古田遺跡、松が丘遺跡、中里遺跡、埼玉県寿能泥炭層遺跡、赤山陣屋跡遺跡、栃木県寺野東遺跡など様々な遺跡において、主に縄文時代後晩期の低湿地遺跡の調査が行われ、考古資料の調査に連動して実施された花粉分析や樹種同定等による古環境研究によって、縄文時代前期から晩期に至る古環境変遷の概要が示された。特に、赤山陣屋跡遺跡の研究によって、縄文時代の古環境変遷の画期が示されたことは、その後の研究のメルクマールとなった。

一方、1990年代の後半から2000年代初めにかけて実施された、東京都下宅部遺跡の発掘調査とその古環境研究は、関東平野の低湿地遺跡の研究における一つの重要な画期となったことは間違いない。2000年以降になって普及したAMS法による高精度な放射性炭素年代の急速な蓄積も、縄文時代における古環境の段階的変遷を理解するのに重要な役割を果たした。ただし、これらの遺跡のほとんどが縄文時代中期以降、特に縄文時代後晩期が中心であり、縄文時代草創期や早期の様相はほとんど解明できていなかった。

そうしたなか、最近になって、関東平野中央部のいくつかの低湿地遺跡での古環境研究の成果が公表された。今回の特集で扱われている、東京都御殿前遺跡、千葉県道免き谷津遺跡と雷下遺跡、埼玉県神明貝塚である。特に、雷下遺跡では、縄文時代早期後葉の約8000年前から7000年

前頃にわたって連続的に貝層が形成され、それが縄文海進によって低地に埋没した状態で検出された。考古遺跡の中でも人類活動・古環境の双方の情報量が極めて多く残されている、いわゆる低湿地性貝塚の一つである。さらに、隣接する道免き谷津遺跡では、縄文時代前期から後晩期までの堆積物が残っており、縄文時代後期の加曾利B式期から晩期の安行3式期にかけて、低地部での活発な人類活動の証拠も残されていた。御殿前遺跡も、縄文時代早期後葉の堆積物が埋没谷から検出されており、これまで不明な点が多かった縄文時代早期後葉の状況がようやく明らかになりつつある。神明貝塚においても、遺跡に隣接する谷で採取された2本のボーリングコアによって得られた縄文時代早期から晩期にかけての堆積物から、古環境のデータが得られた。

そこで、近年これらの遺跡において個別に実施された古環境研究の成果を総合化し、関東平野中央部における縄文時代の古環境研究の最新の状況を紹介することを目的として、今回の特集号を企画した。当初の予定では、合計4~5本程度の原著論文からなる特集号とする計画であったが、いくつかの原稿は本特集号に掲載することができなかった。

本特集が、関東地方における縄文時代の古環境研究のさらなる進展につながり、また人と環境との関係性の歴史を紐解く生態系史研究の基礎となることを期待している。



写真1 御殿前遺跡の谷部の発掘調査の様子。写真中央が谷AのI地点で、壁面に堆積物試料を採取した箇所が見える。

¹ 〒162-8650 東京都新宿区戸山3-20-1 学習院女子大学国際文化交流学部

Department of Japanese Studies, Gakushuin Women's College, 3-20-1 Toyama, Shinjuku-ku, Tokyo, 162-8650, Japan



写真2 雷下遺跡(7)における縄文時代早期後葉から縄文時代前期の貝層群と分析試料採取の様子。



写真3 雷下遺跡(8)で出土した丸木舟と試料採取の様子。



写真4 道免き谷津遺跡1-(4)区の堆積物。最下部に縄文時代前期の海成層があり、その上位に縄文時代後晩期の木本泥炭層が堆積する。



写真5 神明貝塚 No. 1 地点のボーリングコアのサンプリング (春日部市教育委員会提供)。